

「シンガポール国立大学 (NUS) 日本研究学科研修旅行報告会」参加報告

～Sustainable Places: Tourism and the Environment in Japan

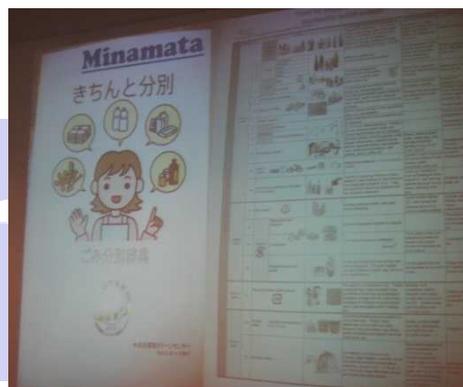
(持続可能な場所：日本の観光と環境について) ～

シンガポール事務所

2012 年 6 月 1 日、在シンガポール日本国大使館に併設された日本文化、技術などの発信拠点である『Japan Creative Centre』において、シンガポール国立大学 日本研究学科学生による研修旅行報告会が開催されました。



【学生によるプレゼンテーションの様子】



【多くの学生が日本のごみ分別方法に関心を持っていた】

Dr. Chris McMorran に引率された日本研究学科の 13 人の学生は 2012 年 5 月に 10 日間九州を旅しました。今年で 2 回目となる日本研修旅行の目的は、持続可能性、持続可能な場所とは何かについて、観光という視点を通して考えることでした。一行は、長崎のハウステンボスを訪れ、革新的な水リサイクルの仕組みなどを見学、諫早湾では干拓事業の現場を視察しました。熊本の水俣市では、水俣病の歴史、ごみの 24 種類分別収集に代表されるごみ減量の取組などについて学びました。阿蘇山、黒川温泉、杖立温泉では、観光と環境保護の関係、観光地を支える人々の取組などについて学び、ファームステイ、ホームステイ、ラフティングなどを通して、地元の人々や自然との触れあい、郷土料理、畑から採れたばかりの新鮮な野菜などを楽しみました。

13 人の学生は、研修旅行を通して持続可能性、環境保護、日本の観光について多様な印象、興味を持ったようです。日本の地方の高齢化、黒川温泉青年部など地域の活性化に自発的に関わる人々の活動、公害を克服し環境モデル都市となった水俣市の取組などについて多くの学生が感銘を受けていました。彼らの視点は、日本の自治体が取り組む海外か

らの観光客誘致活動においても参考となると思われるので、印象的であったものをいくつか紹介します。

●住民によるリサイクル

多くの学生が、水俣市のごみの 24 種類分別収集について発表していました。ボトルや容器を洗って乾かして収集日に出すといった日本では当たり前となっていることが、ごみを分別する必要のないシンガポールに住む学生たちには非常に新鮮に映ったようです。また、使用済み油から石鹸を作ったり、不要になった材木でしいたけを栽培したりするリサイクルの取組も全て住民が主体となっていることに感銘を受けていた様子でした。

●日本のふるさと・田舎

今回の研修旅行で印象深かった場所として多くの学生が、農家での宿泊体験をあげていました。地元の人々との触れ合い、枝豆を植える、採れたての野菜を食べるといった経験が彼らの日本での滞在を思い出深いものとしたようです。報告会の最後に、今回日本で訪れた場所のどこかに長期間住んでもいいと思うかと問われると、半数以上の学生が住みたいと答えていました。シンガポールのような大都市に育った彼らにとっても、ある学生が『INAKA Tourism』と表現していた日本のふるさとの暖かさ、自然に囲まれた健康的な生活は印象深かったようです。

●エコツーリズム

持続可能性について学ぶ今回の研修旅行では、観光客の利便性を優先し、地元の経済的発展を図ることと、自然環境保護を両立することの難しさを感じながら各観光地を視察していたようです。一方で、あるがままの自然を体験できるラフティングやトレッキングは純粋に楽しんだ学生が多かったようです。ある学生は、エコツーリズムを以下のように定義していました。

『Nature-based tours Learning about the history, culture and environmental efforts of a place. Experiencing local lifestyles. Benefit the local community. FUN!
(エコツーリズムとは、自然環境に配慮し、その土地の歴史、文化、環境への取組について学ぶ旅。その土地の生活習慣を体験し、地域社会にも利益をもたらす。楽しむこと！)』

今回、シンガポールの学生が、持続可能な場所とは何かについて、観光と環境をテーマに日本の地方都市の取組について体験しました。

彼らは『INAKA Tourism』を通して、高度経済成長の負の遺産である公害やそこから環境先進都市へと生まれ変わった人々の努力、寂れた温泉街の現状がある一方で、土地の魅力を生かし活性化に成功した温泉街、自産自消の田舎暮らしや高齢化が進む町等、日本の地方都市の現状を目の当たりにしました。彼らの発表を聞きながら、近年、日本でも田舎暮らしが見直されていますが、海外からの観光客にとっても魅力的なのではないかと感じるとともに、特別な名物、名所などがなくても、その土地に住む人々の生活そのものが魅力的な観光資源となるのではないかと考えました。我々が当たり前と思っている日本の地方の魅力を改めて見つめ直し、情報提供していきたいと思います。

(NUS 日本研究学科研修旅行報告会での聞き取りによる)

(新山所長補佐 東京都大田区派遣)

